

# 手話コミュニティにおける語の社会的な役割についての意識調査

岡田智裕<sup>†1</sup> 牧野遼作<sup>†2</sup> 坊農真弓<sup>†1 †2</sup>

**概要**：手話の語(Word)や表現が収録された手話辞典について、以前から主流であった紙媒体の辞典(例えば、紙媒体の『わたしたちの手話学習辞典』)に加え、近年ではインターネットの技術の向上やスマートフォンの普及により手話表現を調べるサイトも増えてきている(例えば、オンラインの手話辞典『Weblio 手話辞典』)。以上のように、手話表現に触れる方法が増えた一方で、これら辞典の利用者の目的と辞典の役割が一致しているのか、どのような人々がこれらの辞典を利用するのかといった社会的な立場の調査がなされていない。本研究では、手話コミュニティにおける語の社会的な役割を調査し、語や表現を検索する方法の現状と問題点について報告する。

**キーワード**：手話、手話辞典、語、データベース

## 1. はじめに

本研究は、手話コミュニティにおける語の社会的な役割を調査し、それぞれのニーズに見合った方法について検討し、手話語彙の検索システムのデザインを提案することを最終的な研究目的としている。本研究で手話コミュニティと呼ぶのは、聴覚障害のある「ろう者」「難聴者」、聴覚障害がなく、かつ手話学習歴がある「聴者」によって構成される。

本稿の第一著者は日本手話を日常言語とするろう者である。第一著者の経験上、手話を日常的に用いるろう者が、手話表現についてネットや紙媒体等で調べない一方、聴者は手話辞典を積極的に活用しているという話をよく聞く。いま現在、我々は上記の手話コミュニティに属する人々は、それぞれのカテゴリ特性によって、手話表現を調べる手法が異なる可能性を想定している。

なお、ここでは手話辞典というときは何の断り書きがない限り冊子体辞書、インターネット辞書を含むものとする。本発表では、手話コミュニティ内での手話辞典の使われ方を当事者によるアクティブ・インタビューの手法で調査し、当該コミュニティにおける「語」の社会的な役割について議論し、それぞれのニーズに見合った語や表現を検索するシステムデザインについて検討する[a]。

## 2. 先行研究

これまで、本研究が試みるような当事者による手話コミュニティにおける「語」の社会的な役割に関する調査はなされていない。本節ではまず、手話の語を調べる方法について紹介する。そして2節の最後に手話辞典の現状についての筆者らによる仮説を述べる。

### 2.1 日本における日本手話辞典の発行

日本手話の単語を取り扱った書籍はこれまでに何十冊も出版されている。例えば、全日本ろうあ連盟によって1969年に出版され、後に第10巻まで、発行された『わたしたちの手話(1)』[1]や2012年の『すぐに使える手話パーフェクト辞典』

辞典』[3]が挙げられる。

特に『わたしたちの手話(1)』～『わたしたちの手話(10)』[2]は、全国的に手話の標準化を目指すと共に、手話サークルの学習テキストとして用いられることを目的として発行されたものである[4]。

インターネット上の日本手話辞典として、Weblio 手話辞典や、アニメーション手話単語辞典が挙げられる。最近ではスマートフォンのアプリとして、ゲームで学べる手話辞典も出されている[b][c][d]。

### 2.2 手話の「語」を検索するための既存システム

紙媒体の書籍のほとんどが「日本語」から検索する方法が大半である。少数ではあるが、手話の音韻(手形、手の動き、手の位置、手の向き)から手話の「語」を検索するシステムがいくつかある。

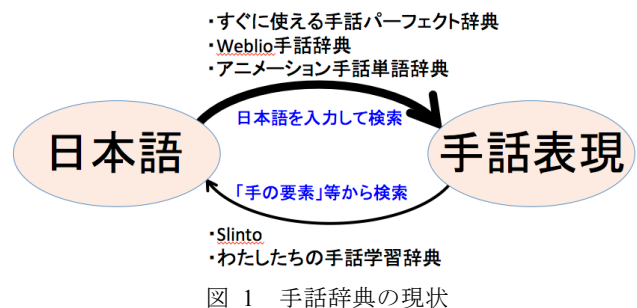


図1 手話辞典の現状

日本では、書籍ならば『手話・日本語辞典』[6]や『わたしたちの手話 学習辞典』[7]が挙げられる。どちらも前者は手形から調べる方法となっている。

インターネット上では、SLinto[e]が挙げられる。SLintoは手形と手の位置から検索する方法である。その上、ユーザ参加型の手話辞典となっており、ろう者・聴者問わず誰でも動画を投稿できるシステムとなっている。現在の手話辞典といえば、日本語から手話表現を検索する辞典は『すぐに使える手話パーフェクト辞典』や『Weblio 手話辞典』、

b) Weblio 手話辞典 <http://shuwa.weblio.jp/>

c) アニメーション手話単語辞典 <http://jiten.ks2.info/>

d) ゲームで学べる手話辞典 <https://itunes.apple.com/jp/app/gemude-xueberu-shou-hua-ci/id779515889?mt=8>

e) SLinto <http://slinto.com/jp/>

†1 総合研究大学院大学

†2 国立情報学研究所

a) 「語」とは、語彙や単語、複合語を含めるとする。

『アニメーション手話単語辞典』が挙げられ、手話表現から日本語を調べる辞典は『SLinto』や『わたしたちの手話学習辞典』が挙げられる(図 1)。これは、日本語の単語を手話表現に当てはめた辞典のため、英和辞典(英単語帳)と似た役割のように思う。つまり、英英辞典のように、手話で手話を調べるという辞典は今のところない。

### 2.3 仮説

以上のように、手話の語を調べる方法自体は様々である。しかし、手話を日常的に用いるろう者は、英和辞典と同様の扱いとなり得る日本手話辞典手話表現についてネットや紙媒体等で調べる事は少ないが、聴者は手話辞典を積極的に活用しているという話を聞くことが多い。本稿は、以下の仮説を提起し、これらの仮説を検証するためにアクティブ・インタビューを実施する。

- 仮説(1) 手話を日常言語とするろう者は、手話辞典で語を調べるのが少ない。
- (1-a) 紙媒体は使わない
  - (1-b) ネットを使う
- 仮説(2) 手話に接することがある難聴者は、手話辞典で語を調べるがある。
- (2-a) 紙媒体を使う
  - (2-b) ネットを使う
- 仮説(3) 手話を学んでいる聴者は、手話辞典で積極的に語を調べている。
- (3-a) ネットを使う
  - (3-b) 紙媒体を使う

仮説(1)は、当事者(ろう者)である第一著者の経験上、手話を日常言語とするろう者は基本的に手話辞典で語を調べることは少なく、紙媒体の手話辞典は使わないと考えた(1-a)。しかし、一方で、ろう者のほとんど(特に若年層)がネットユーザーであり、ネットの何らかの語彙検索システムを利用している可能性を考えた(1-b)。

仮説(2)は、手話に接することがある難聴者は成年後に手話を習得するレイトラーナーである場合が多いため、基本的に手話辞典で語を調べることがあり、紙媒体(2-a)とネット(2-b)両方の手話辞典を使うと考えた。

仮説(3)は、手話を学ぶ聴者は手話学習の只中にいるため、手話辞典で積極的に語を調べており、紙媒体(3-a)とネット(4-b)両方の手話辞典を使うと考えた。

これらの仮説を検証するために、インタビューにおける質問事項の流れを前もって半構造化した。その流れを図 2 に記載する。「初めて見る、分からない手話表現を見た時」の状況は、次の 2 つが挙げられる。1 対 1 の会話と、講演・PC 動画視聴の 2 つである。この図 2 は後者、すなわち「講演・PC 動画視聴」の場合の流れとなっている。もし、隣に友達がない場合は「後で聞く」か「諦める」、「辞典を使

う」の選択肢が挙げられる。さらに「辞典を使う」場合は、ネット上の辞典、あるいは紙媒体の辞典のどちらかが挙げられる。

もし「初めて見る、分からない手話表現を見た時」の状況が 1 対 1 の場合は、ほぼ全員が目前の話し手に聞くのが通常であろう。話し手が目の前にいるにも関わらず、わざわざ辞典で調べるという行為は現実的ではないように思われる。そのため、1 対 1 の流れは図 2 に含んでいない。

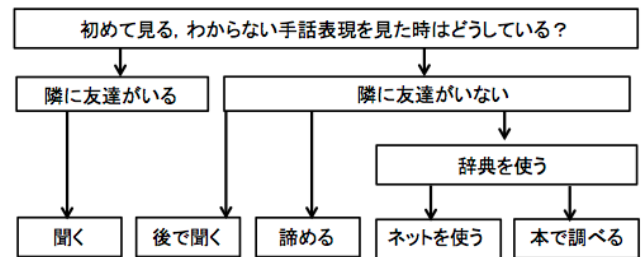


図 2 半構造化した質問事項

## 3. 方法

### 3.1 アクティブ・インタビュー

ここでは、手話の「語」の現状や内的問題点を把握したため、アンケート調査のような量的研究ではなく、質的研究として、参加者の回答に合わせて、質問内容を変えながら進めていく語り(ナラティブ)形式のアクティブ・インタビュー[5]を採用した。アクティブ・インタビューとは、参加者の語りの産出を活性化するようにインタビューを行い、その語りから現実を構築し意味を作り出すという、相互行為(インタラクション)的なナラティブの手法である[5]。

### 3.2 参加者

参加者については、ろう者は 11 人、難聴者は 7 人、聴者は 8 人である。そして、参加者の手話学習歴については、最短で 6 年、最長で 40 年であった。ただし、すべての参加者から手話学習歴を聞くことは出来なかった。表 1 はインタビュー参加者の区分、年代、手話学習歴についてまとめたものである。

以上のように、合計 24 名の参加者の協力によって、13 グループのインタビューを実施した。収録したインタビュー映像は 5 時間 7 分に及んだ。

なお、本インタビューでは 1 対 1 の 2 人対話の形式だけではなく、インタビュアーと、複数の参加者から構成される多人数会話の形式でのインタビューも実施した。インタビュアーと参加者 1 人からなる 2 人対話形式でインタビューを実施したのは、4 組となり、インタビュアーと参加者 2 人の 3 人会話の形式は 7 組や、インタビュアーと参加者 3 人による 4 人会話の形式は 1 組、インタビュアーと参加者 4 人による 5 人会話は 1 組であった。インタビューの後、参加者の回答を文字へ起こし、半構造化した質問事項のパターンに当てはめる作業を行った。インタビュー内容につ

いては文字起こし作業の結果、文字起こしテキストの総文字数は18,763字となった。

表 1 参加者の情報

区分	年齢(代)	手話学習歴(年)	ペア
ろう者 (11人)	10	ネイティブ	A
	20	ネイティブ	A
	20	ネイティブ	B
	20	8	C
	20	10	D
	20	10	D
	20	12	E
	20	14	C
	40	?	F
	50	?	G
	50	?	G
難聴者 (5人)	20	6	C
	20	12	H
	20	13	C
	20	?	H
	70	40	I
聴者 (8人)	20	6	J
	20	7	J
	20	10	B
	30	?	K
	40	?	K
	50	12	L
	60	30	M
	70	10	M

※列「ペア」は、インタビューグループをABC順に分けたものである。

### 3.3 当事者によるインタビュー

ここまで述べてきたように、本稿の第一著者は聴覚障害を持つろう者であり、すなわち当事者である。本研究で実施したアクティブ・インタビューはすべて手話を用いて進められた。手話を生活言語とするろう者のみならず、手話に接することがある難聴者も、手話を学んでいる聴者も、ろう者であるインタビュアーと手話でやりとりすることが全く問題にならないほどの手話の話し言葉スキルを持っている。

当事者がインタビューすることの利点は、(1) 同じ手話コミュニティの成員であるという意識から、率直なコメントや意見が出ること、(2) インタビュアーが事前に想定していなかった返答があった場合にもインタビュアーのそれまでの経験などから多彩な進行が可能になるということなどが挙げられる。

### 3.4 撮影機器

本インタビューの撮影に用いた機器は PIXPRO SP 360 4K である(図 3)。大きさが約 5cm と正方形に近い形で、手のひらにすっぽりと収まるほど小さい上、高画質で撮影できる撮影機器である。一般家庭用のビデオカメラではカメラ自体が目立つ為、撮られているという意識がもたれるため緊迫感を与えてしまうが、この機器では小型のために、撮られているという意識を最小限に抑えることができ、より自然な会話やインタビューに適していると言えよう。

その上、全角を同時に撮影できるため、多人数(多くて4~5人まで)の会話の撮影に向いている。その撮影したデータは PIXPRO 専用のソフトウェアを用いて2画面や4画面などに編集することができるため、映像を用いた分析に適した機器といえる(図 4)。今回のインタビューでは、この機器を参加者とインタビュアーの中央に位置するところに置いて撮影を行った。



図 3 PIXPRO SP 360 4K の外観



図 4 4画面の映像データへ出力可能  
 (個人情報保護のため映像をイラスト化)

## 4. 分析

### 4.1 分析 1: インタビュー結果の集計

分析 1 では、各カテゴリに分けてインタビュー結果の全体の傾向を集計し、議論する。

まず、ろう者 11 人にインタビューした結果を図 5 に示す。初めて見る手話表現や分からない手話表現を見た時に、隣に友達がいる場合は 11 人中 5 人が「聞く」であった。一方、隣に友達がいなかった場合は「諦める」が 8 人で「後で聞く」が 3 人であった。辞典を使うという人は誰もいなかった。

ここで注意しなければならないのが、11人全員に「隣に友達がいる場合」と「隣に友達がない場合」について質問していないため、5人が明確に「隣の友達に聞く」という回答があったため、11人中5人と記載した。

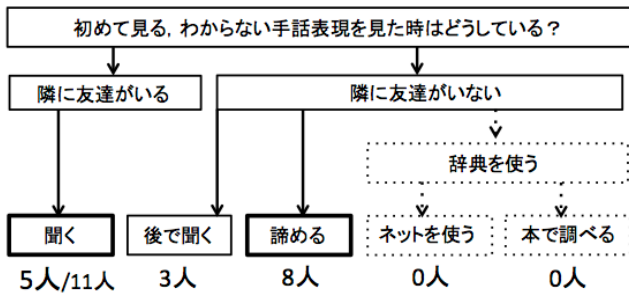


図 5 分からない手話に出会った時の行為(ろう者)

次に、難聴者7人にインタビューした結果を図6に示す。初めて見る手話表現や分からない手話表現を見た時に、隣に友達がいる場合は5人中4人が「聞く」であった。一方、隣に友達がない場合は「諦める」が2人で「後で聞く」が3人であった。辞典を使うという人は誰もいなかった。

ここでも注意しなければならないのが、5人全員に「隣に友達がいる場合」と「隣に友達がない場合」について質問していないため、4人が明確に「隣の友達に聞く」という回答があったため、5人中4人と記載した。

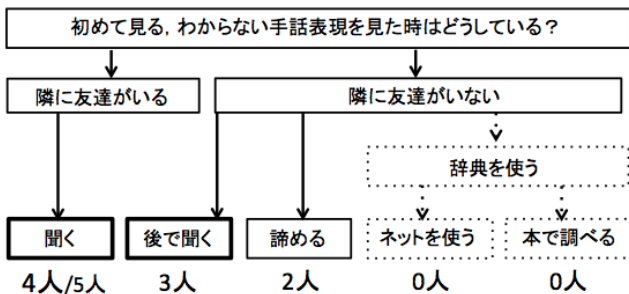


図 6 分からない手話に出会った時の行為(難聴者)

最後に聴者8人にインタビューした結果を図7に示す。初めて見る手話表現や分からない手話表現を見た時に、隣に友達がいる場合は8人中3人が「聞く」であった。一方、隣に友達がない場合は「諦める」が5人で「後で聞く」が3人であった。辞典を使うという人は誰もいなかった。

ここでも注意しなければならないのが、8人全員に「隣に友達がいる場合」と「隣に友達がない場合」について質問していないため、3人が明確に「隣の友達に聞く」という回答があったため、8人中3人と記載した。

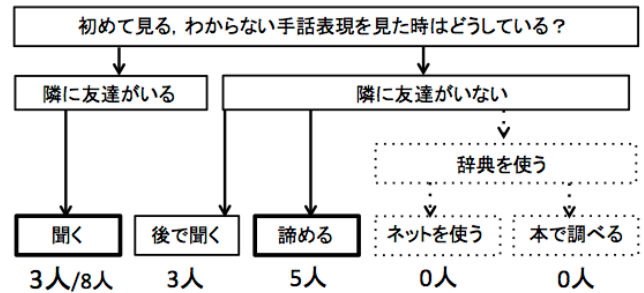


図 7 分からない手話に出会った時の行為(聴者)

図 8 は図 5 から図 7 の結果の一部の集計である。

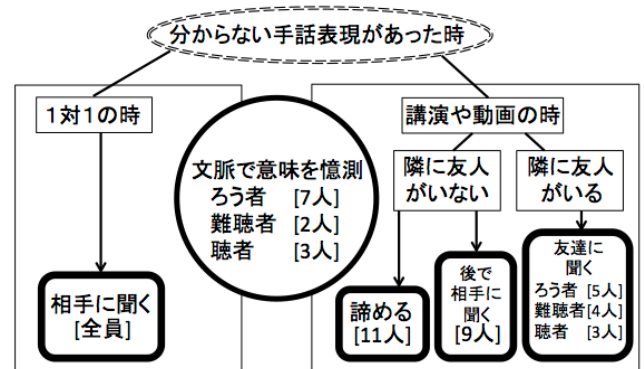


図 8 分からない手話表現があった場合の行為

ろう者、難聴者、聴者を通じて共通していることは、誰一人も「辞典を使う」という行為を選択しなかったことである。非常に限定的ではあるが、特別な条件が合えば、手話辞典を用いて手話表現を調べるといった人が1人いた。その1人は、その分からない手話表現が明確に国名関連のカテゴリーに位置する手話表現であると推測した場合は本で調べるとの事であった。しかし、その手話表現が国名でない場合は諦めるとのことであった。手話辞典で調べない理由として「手話学習者が使うもの(10人)」、「面倒(9人)」が挙げられた。「手話学習者が使うもの」と答えた人は、ろう者9人と聴者1人であった。そして「面倒」と答えた人はろう者が3人、難聴者が2人、聴者が4人であった。

また、全体的に、講演や動画視聴の時に隣に友達がいなくても手話表現について聞かず「文脈で意味を憶測する」という人が、ろう者7人、難聴者2人、聴者3人であった。これは、分からない手話表現があったとしても「語」に一つ一つに対応する意味を考えず、文脈で意味を憶測したり、繰り返し表現することで手話表現の意味を捉えていることを意味している。

しかし、予想もしていなかった回答がいくつか見られた。例えば、分からない手話表現があったとしても、口の動きで手話表現の意味を掴むという人が2人いた。その他、分からない手話表現の意味を文字通訳で一致したり、憶測したりしながら解決していく人が1人いた。これらは、いず

れもろう者からの回答である。このような回答は、ろう者が日本手話と日本語のバイリンガル環境から、「語の意味が分からない」という問題を独自の手法で解決していると理解することができる。手話通訳が用いる新規の語彙は、手話通訳が付与する口の動きや文字通訳が同時に提示する文字情報によって、意味が明らかにされていくのである。

#### 4.2 分析 2: インタビュー結果の質的分析

分析 2 では、インタビュー結果の一部の文字起こしテキストを提示し、そこでのやりとりからそれぞれのカテゴリの人々の意識について議論する。

最初に「分からない手話を見た時はどうする？」と質問した時の回答の大半が、1対1で話している状況を考えての回答であった。その事例を以下に3つあげる。

##### 【事例 その1 (ろう者の場合)】

(A: 参加者, I: インタビュアー)

I: 手話の意味を知りたい場合はどうする?

A: 目の前にいる人に聞く

I: 講演の場合は?

A: 隣の人に聞く

I: もしその人が分からない場合

A: 講演が終わった後に他の人に聞く。

##### 【事例 その2 (難聴者の場合)】

(B: 参加者, I: インタビュアー)

I: 分からない手話があったときは?

B: その場で聞く

I: パソコンとかの映像だったら?

B: その手話表現を覚えていたら、あとで聞く。

##### 【事例 その3 (聴者の場合)】

(C~D: 参加者, I: インタビュアー)

I: 初めて見た手話があったときは?

C: 話している本人に聞くね

D: (話している本人に) 聞く

I: 講演の場合は?

C: 音声通訳があるから大丈夫かな。

D: 音声通訳が付いていない場合は諦めるね。

この質問を受けた時、参加者らが真っ先に思い浮かべる状況が「1対1の手話会話」という事であったことは興味深い。ろう者、難聴者、聴者問わず、手話は動画を通して観るという機会よりも直接面を向かい合って話す方が圧倒的に多い為、その場で用いるという概念の上で成り立っているようにも思える。

逆に、分からない手話表現があった場合は手話辞典を使わないが、家の中などで手話辞典を使う人は6人であった。その6人の区分は、聴者が3人、難聴者が2人、ろう者が1人であった。その理由を聞いてみると以下の事が挙げられた。

- ・特定の日本語に対応する手話表現を調べるため
- ・国名手話や地名手話の表現を調べるため
- ・特定の日本語に対応する新しい手話の表現について目を通すため

大半が日本語に対応する手話表現を調べる、あるいは確認するために手話辞典を用いているということであった。4節で述べた、辞典を用いない理由に挙げられた「手話学習者が使うもの」や「面倒」は、手話辞典の役割の向上や使用方法を改善すれば、自ずと解消されると思われる。

しかし、参加者の回答の中に「わからない手話を見た時に、構成要素(手形や動き、位置)を明確に覚えていない故に後で辞典を用いて調べることができない」という記憶の問題が挙げられた。その点は筆者の勝手な視点ではあるが、聴者が外国語を聞いたときに、正確なスペルが分からず、後で辞典などで調べる事ができない状況と似ていると思われる。この点を解決する方法は非常に難しいように思われる。

## 5. 議論

2.3節で以下の仮説を提起した。

仮説(1) 手話を日常言語とするろう者は、手話辞典で語を調べる数が少ない。

(1-a) 紙媒体は使わない

(1-b) ネットを使う\*

仮説(2) 手話に接することがある難聴者は、手話辞典で語を調べることがある。

(2-a) 紙媒体を使う\*

(2-b) ネットを使う\*

仮説(3) 手話を学んでいる聴者は手話辞典で積極的に語を調べている。

(3-a) ネットを使う\*

(3-b) 紙媒体を使う\*

今回の聴者の結果、\*印が付いている仮説はすべて棄却されたことになる。

本調査の結果、すべてのカテゴリの人々が手話辞典を使わないという結果が出たが、実際には紙媒体の手話辞典は多数出版されている。多数出版されているということは、購入する人が多数いるということであろう。そうでなければ、紙媒体の手話辞典はとうの昔に絶版されているはずである。今回のインタビューにおいて、参加者のうちの聴者は手話学習歴が最低でも6年以上であった。また、参加者の聴者の中には、手話通訳として活動している人もいれば、趣味として学んでいる人とまちまちである。つまり、手話学習歴が長い人は使わない傾向にあるのかもしれない。この結果は非常に興味深い。今現在出版されている手話辞典は、手話を全く知らない人々に向けて発行されているもの

で、手話はある程度学んだ人、手話に日常的に触れている人はターゲットにはなっていないのである。英語のイデオム表現などを考えてみると、10年以上の英語学習を経験した人でも英英辞典や英和辞典を用いる傾向にある。すなわち、手話はある程度知っている手話コミュニティが利用可能な手話辞典や手話検索システムは未整備の状況にあると理解することができる。手話に触れた経験のある人は年々増え続けている。それらの人らの継続的な手話学習のためにも、こういったターゲットに向けた手話辞典や手話検索システムの検討が必要であると考えられる。

今回のアクティブ・インタビューにおいては回答に合わせて質問する形式であるため、参加者全員に対して完全に共通した質問をすることは難しい。そのため、こういう質問をすればよかったと思う箇所が多かった。その対処法について検討していきたい。

今後は手話に触れたばかりの人を対象にインタビューを実施し、手話辞典を利用する方の立場を分析していきたい。また、同時に手話はある程度知っている手話コミュニティの成員に対するアプローチも検討し、各手話辞典の役割の明確化や使用方法についても検討していきたいと考えている。

## 6. おわりに

本研究では、分からない手話表現を見たときの行為について仮説を提案し、アクティブ・インタビューを行った。今回は、分からない手話表現があったとき、日常的に用いるろう者は、ネットや紙媒体等で調べる事は少なく、難聴者と聴者はネットや紙媒体等の手話辞典を積極的に活用するという仮説であった。実際は、ろう者も聴者も誰も辞典を使わなかった。手話コミュニティにおける「語」については、全体の文脈から「語」の意味を推測するだけでなく、他の情報保障（文字通訳や音声通訳など）で意味を一致するというように、様々な手段を用いて解決していることを窺い知ることができた。

最後に、今回のインタビューにおいて、PIXPRO SP360 4Kを用いた。通常のカメラと比べて小型の上、その機器の位置や存在を気にせず話せる雰囲気を作れたようにも思う。

例えば、撮影されているにも関わらず、他の話題に入ったり、プライベートな話に入ったりという事があった。また、記述的アンケートでは得られない、参加者からの要望や本音をいくつか聞くことができた。

このことから「撮影されている」という緊迫感を最低限に抑えながらインタビューを行うことは、奇をてらわず本音を出せる場となり得ることが示唆された。

また本稿は、ろう（岡田）当事者による研究としてアクティブ・インタビューを行った結果であることを、改めてここに強調する。

## 7. 謝辞

本原稿は、筑波技術大学の杉豊教授から分析や議論について多くの意見をいただいた。また、インタビューに参加して下さった24人から貴重な回答と意見をいただいた。ここで感謝を述べたい。ただし本稿の認識の誤りがあれば全て執筆者の責任である。

## 8. 参考文献

- [1] 全日本聾唖連盟手話研究委員会. (1969) 『わたしたちの手話(1)』全日本ろうあ連盟.
- [2] 全日本聾唖連盟手話研究委員会. (1987) 『わたしたちの手話(10)』全日本ろうあ連盟.
- [3] 米内山. (2012) 『すぐに使える手話パーフェクト辞典』ナツメ社.
- [4] 高田英一. (2013) 『手話からみた言語の起源』（手話の秘密シリーズ1）文理閣.
- [5] ジェームズ・ホルスタイン, ジェイバー・グブリアム (2004) 『アクティブ・インタビュー 相互行為としての社会調査』山田富秋, 兼子一, 倉石一郎訳. せりか書房.
- [6] 竹村茂. (1994) 『手話・日本語辞典-手の形から手話がわかる』廣済堂出版.
- [7] 全国手話研修センター日本手話研究所. (2010) 『わたしたちの手話 学習辞典』全日本ろうあ連盟出版局.